映画評

一般

『ヴァイブレータ』

井上静夫　同人誌主宰

２００３年　シネカノン　９５分
監督　廣木隆一　脚本　荒井晴彦
出演　寺島しのぶ、大森南朋、

赤坂真理の同名小説を映画化した若い男女の孤独な物語である。心に問題を抱える女が、コンビニで出会ったトラック運転手の男と行きずりの関係にしだいに癒されてゆく……と簡単に語ることもできる映画であるが、それだけでは片付けられない唯一無二の作品である。

頭の中の声が聴こえ、不眠と過食嘔吐に悩む３１歳の女を寺島しのぶが、金髪に染めたトラック運転手を大森南朋がそれぞれ演じている。映画はこの二人がトラックという密室空間を中心に、東京から新潟までトラックで移動するというロードムービーの形式で描いている。

全編ほぼこの二人しか出てこない。そしてこの二人が役に乗り移ったかのような見事な演技をしていて、それに支えられた映画となっている。

寒々とした真冬の、青みがかったうつくしい映像が二人の孤独をいっそう浮かび上がらせ、男も女もお互い、少しずつ近づいては孤独を埋め合わせようとする。そして孤独なこの二人、何かが欠如しているように見える。その欠けているところを満たそうとするかのように言葉を重ね、体を重ね、心を重ねていく。濃密にして危うく、脆く、そして痛々しい関係。それ故なのか、二人が交わるシーンは官能的、エロティックであるというより、どこか肌のぬくもりを感じさせ、夢のようなリアリティーが感じられる。そんな肉体関係があったり、あるいは女の嘔吐シーンだったり、映像的にはドロドロ系になるところであるが、そうはなっていないところにこの映画の魅力がある。

二人の乗るトラックの走行、雪景色、生々しい朝焼け、吐息で曇る窓、舗道の子どもの目など、二人の周りのディテールにも目を見張るべきものがある。

映画は女の視点で語られていく。もともとセリフ自体、少ないのだが、ときどき挿入される独白の字幕が一人称としての女の内面を浮き上がらせ、自意識との葛藤が痛々しくも悲しく、増幅してゆく。その痛々しさや悲しみを男はやわらかく受け止め、どこまでもやさしく、あたたかく応

じてゆく。やがて女は自分を取り戻していき、同時にその過程にはやさしい時間が流れていく。

「彼を食べて彼に食べられた。それだけのことだった。ただ、あたしは自分がいいものになった気がした」

女がラストにつぶやいた言葉が印象的だ。

コンビニで出会い、コンビニで別れた二人。東京から新潟の７２時間で別れた二人。ラストの二人の表情は特に秀逸で、観た人はこれに救われるような気がする。それまでの関係とは裏腹に、このラストにはどこかすがすがしさと安堵が内包されているように思えるからだ。

映画の中の女の感情を掘り進めていくと、その先には誰にもある普遍が存在する。……「この映画には観ているあなたのことが描かれている」。普遍であるが故、映画がこう言っているようにも聞こえる。

男女の出会いの心の〈ふるえ〉、トラックのアイドリングの〈ふるえ〉、女の泣くときの肩の〈ふるえ〉、そして誰もが孤独で心を〈ふるわせて〉いる。『ヴァイブレータ』とはそんな「ふるえ」を描き切った稀有な作品である。けれど、見終えたときには、なぜか上質なフランス映画のような空気感が漂っているようだった。

蛇足であるが、廣木隆一は、この作品の後に、脚本の荒井晴彦と主演の寺島しのぶと再びタッグを組んで、「やわらかい生活」という秀作も作っている。

『凱里（かいり）ブルース』

水野圭次郎　むぎのえいが部

２０１５年　中国　１１０分
監督　ビー・ガン
出演　チェン・ヨンゾン

彗星のように現れた中国の若手監督「ビー・ガン（畢贛）」

『凱里ブルース』という題名に惹かれて、５か月ぶりのシネマスコーレで鑑賞しました。

私は１９９０年代前半に中国に２年間留学しており、長期休暇を利用して辺境地帯の少数民族の写真を撮り歩いていました。ですから凱里というのは貴州省の地方都市の地名でミャオ族などの少数民族が多く住み、盛大な祭りがある地域ということは知っていました。ミャオ族の文化と日本の古代文化は棚屋建築、水稲耕作、闘牛、わらじ、餅など共通するものが多く、日本のふるさとではないかとも言われています。

さて、この凱里ですが中国の中でも貧困地域に当たり、郊外には毛沢東時代かと思わせるような集落がそのまま残っています。まだ、こんなところがあるんだとこの作品を見てびっくりしました。そんな辺境の街からビー・ガンという驚くべき才能を持った若者が現れ、山西省太原市の山西伝媒学院で映画製作を学んだ後、彼の才能を認めた大学の恩師から出資を受け、２６歳で『凱里ブルース』を制作します。しかし、資金が十分ではなかったため、主役は映画や文学の好きな監督の叔父が演じ、その他の出演者もほとんどが家族、友人だったそうです。彼らのほとんどが役者経験は無く、素のままに演じていましたが、それを却って新鮮に感じました。

低予算映画とは言え、４０分ノーカットのロングショット、映画の中のテレビ番組で主役が本作の製作者や出演者の名前を主人公が読み上げたり、映画のタイトルが数十分過ぎてから現れたり、往年の童謡が流れたり、凝りに凝っていて、そのアイデアには驚かされました。

冒頭では釈迦が須菩提に告げた「金剛般若経」より次の一節が引用されています。

「過去の心はとらえようがなく、未来の心はとらえようがなく、現在の心はとらえようがないからだ」

そして、その言葉のように「過去、現在、未来」が交錯し、霧のかかった夢の中の話のようで、一度見ただけではそのシーンが何を意味し、何とつながっているのかなかなか理解できません。しかし、なぜだか映像にぐいぐいと引

き込まれてしまいます。この作品を２６歳で撮ったというのは驚くべき才能だと思います。

すでに公開されている新作の『ロングデイズ・ジャーニー　この夜の涯てへ』は『凱里ブルース』と同じく凱里が舞台で、後半６０分を３Ｄカメラでノーカット撮影されていると聞きました。とにかくこの監督の作品は色彩がとても美しく、アイデアに満ち溢れているので、鑑賞するのが楽しみです。

今後が期待されるビー・ガン監督からますます目が離せません。

チベット ラサの街角で　筆者撮影

『よこがお』

安井　文　謎の美女

２０１９年　KADOKAWA　１１１分
監督・脚本　深田晃司
出演　筒井真理子、市川実日子、池松壮亮

ラストシーンが印象的だ。

走る車のドアミラーに主人公の顔が映る。ピントの合わない景色は走馬灯のように流れる。彼女は一瞬ドアミラーに視線を送るが、その後は前だけを見つめる。そして、音のない真っ黒なエンドロールへ。

初見は、はっきり映る彼女の表情がこわばって見え、対照的にぼんやり速く流れる景色が怖かった。それまでに繰り広げられた出来事と結果がつらいものだったから、息苦しさを覚えた。エンドロールの間中、身を硬くしたまま呆然とスクリーンを見つめていた。

再び観たとき、彼女は安堵しているように見えた。流れゆくぼんやりした景色は、ただそれだけだった。エンドロールの最初、音がないことに気づく。そのうち日常音が控えめに聞こえてきて、耳を澄ましているうちに心が落ち着き、終わる頃には心の中にかすかな暖かさを感じた。

物語は変わらないのに、こんなに正反対の感想を抱いたことに驚く。気分に左右されているのは間違いないが、こうはっきりと感じ方が違うことは、そうそうない。再度観たら、また違う気持ちになるのだろうか。

スクリーンの彼らはただ行動するだけだ。かすかな感情の動きは表情や仕草に見え隠れしているが、セリフで説明したり、つじつまが合わされることはない。メイキング映像を見ると、説明的なシーンはすべてカットされたことが分かる。

物語を動かす重要なシーンは、顔に影が落ちて表情が見えない。凝視しても見えないから、想像するしかない。すべてが観る者にゆだねられる。

物語は、主人公を演じる筒井真理子さんの魅力が存分に発揮されるように紡がれており、彼女を取り巻く市川実日子さん、池松壮亮さんはじめ他の役者は彼女を盛り立てる。そして、彼らの確かな演技力を深田晃司監督の演出が確実に引き出す。

それらをさらに引き立てるためのカメラワーク、照明で操る光と影、音などが絶妙に調整されている。すべてがうまく融合しているから、こちらは物語に没頭できる。

映画は感じるものだ。脳神経にこびり付いた錆をふるい

落とし、居眠りする知的好奇心をたたき起こす。そして、観る前には想像すらしなかった新しい考えや気持ちが生まれる。また一つそんな作品に出会えて胸が震えた。

『ターミネーター：ニュー・フェイト』

旧作レンタル　ときどき映画館

２０１９年　アメリカ　１２９分

監督　ティム・ミラー

出演　アーノルド・シュワルツネッガー

リンダ・ハミルトン

『ターミネーター２』（１９９１）がアクション映画の超名作であることに異を唱える人はいないだろう。

輝かしいハリウッド映画時代、その代表作の一作品で、花金のロードショウでお茶の間にたくさんの家族が興奮の花を咲かせたものだ。

打って変わって時は２０１９年。ターミネーター２の監督ジェームズ・キャメロンが本作の正統な続編と位置付けて、ターミネーターシリーズの製作として打ち出したのが、本稿のタイトル『ターミネーター：ニュー・フェイト』というワケだ。

じゃあ『３』や『４』(※1)はなんだっていうんだい、中途半端なモノを作るんじゃないよって、映画にあるある、よくわからない続編とは、商業目的でワンサカ作られているのでここは目をつぶって作品を見てみようじゃあないか。

（『アダムスファミリー(※2)３』は許さないが）

監督はみんな大好き若者の間で最近２も出てます『デッドプール』のティムミラー、もちろん我が家にＢＤがありますよって、買ったのは弟なんですけどね。『ニュー・フェイト』ももちろん新作レンタルで見ましたよ。最近のレンタルは半年足らずで店頭に並ぶし、今年３月に公開した『ハーレークインの華麗なる覚醒』なんてわずか３か月でレンタル開始なんてどういったご時世なんでしょうね。

有料チャンネルと映画館との間で摩擦が起きている話題はまたよそでやってもらって、そろそろ本題に入らせてもらいますよ。

そもそも『１』、『２』のファンを無視した内容に失望の色を隠せないのは、さんざん守ろうとしていたコナーが死んじゃったってトコにありますよ。

いままでの努力が無駄だったって話は、『エヴァ・破』(※3)で頑張って綾波(※4)を助けたシンジ君(※5)が『Ｑ』(※6)でワ

ケわかんない事になってるって感じと似てますね。
内容もポリコレ(※7)意識しすぎて変。コナーの代わりにラテン系の普通の女の子ダニーが未来の指導者って、要はだれでも指導者になれる（なる）んじゃないの？
未来から味方に来たグレースとか言う女兵士も何しに来たのっていうレベルで全然役に立たないお荷物。何も考えないで裸で歩いてたら過去に飛ばされたんじゃない？
っていう何の策略も戦略も勝算も知性もなく、美貌と裸で未来からきた瞬間が最大の見せ場でしたね。
ストーリーも古臭い化石みたいな内容で、逆タイムスリップしたのかと思ったくらい。
新型ターミネーターがオフラインってなに？未来から来てるのに逆探知でも恐れたわけ？とんだ旧式ですね、でもサーバーにはアクセスできるとか意味不明。大型サーバー施設で主人公達の位置特定って、笑っちゃった。携帯からでもできそうだし、何トロトロやってんのって感じ。自分が新型のターミネーターならダニーなんてＭＫ５で瞬殺ですよ。
また、散々理論展開されている時間跳躍の所も、今の日本は平行世界線で忙しいのに、いつまでも隣の未来からタイムマシンでこんばんわって、ヨネスケでもやりません。
褒められるところ…といえば、アクションはものすごい力がはいっていますね。お金もかかっているんじゃないでしょうか。飛行機の中で敵との攻防戦。
飛行機の上昇、下降の中での戦闘は手にあせ握・・りません。いいかげん、今の若者はそんな右へ行ったり左へいったりヤキモキする戦闘はうっとおしいだけ。
スタイリッシュにサクっと終わらせるのが今のアクション映画のトレンドですよ。後半の水中戦でも同じようなことをしてるから、天丼かよって思っちゃった。ティム・ミラー監督らしからぬ演出。ジェームズ・キャメロンと衝突して二度と組まないってすごく納得する内容だったよ。
そして、シュワちゃんの扱いもなんか最悪。いつの間にか殺された、コナーを殺した『２』の型と同じで、結婚して、でも愛する心はないって設定モリモリで観客おいてけぼり、映画観る前に小説みとけって話ならそれは続編娯楽映画ではなくて、ただのファンアートですよ。頭カラッポでワクワク見たいのにいちいち引っ掛かりやがる。『２』でカッコよく死んだシュワちゃんって何だったのよ。
ラストはネタバレするので書きませんが、機械が残ったまま終わります。また同じ機械の未来になるじゃない。『２』の教訓どこ行ったんだよって全員が思わざるを得ないガバ

ガバ設定っぷり。見て疲れたわ。

閑話休題、『トレインスポッティング２』(※8)はよかったです。今回の引き合いに出したのは、同じ期間が開いたのに続編がきちんとできていたものとしてあげました。おすすめです。

そして最後に、『ターミネーター２』といえば「アイルビーバック」。今回、サラ・コナーがドヤって言うのですが、（映画の宣伝でも、あたしがアイルビーバックって言うわよ！って）最初の方でそんなキメシーンじゃない時に使います。扱いがホント雑。

しかも、吹き替えで見ていたので、ふつうに「またね」みたいな日本語・・ここは吹き替えでも「アイルビーバック」ってしゃべんなきゃダメでしょ。

【注釈】

※1…『３』や『４』

ターミネーターシリーズは、『２』の後『３』『４』が作られている。『３』は監督をキャメロンに断られ、『４』は新３部作となるはずが製作会社倒産で打ち切り。興行的にも振るわなかった。

※2…アダムスファミリー

アメリカのホラー・コメディ映画。シリーズとして『アダムスファミリー』（１９９１）、『アダムスファミリー２』（１９９３）の２本が作られているが、『２』が絶品！

※3…『エヴァ・破』

正式名称は、『エヴァンゲリヲン新劇場版：破』。大ヒットアニメ『新世紀エヴァンゲリオン』シリーズの２１世紀劇場版２作目。１作目の『序』を上回る大ヒット。

※4…綾波

綾波レイ。エヴァシリーズのヒロイン。

※5…シンジ君

碇シンジ。エヴァシリーズのヒーロー…かな？。わりと変態。

※6…『Ｑ』

正式名称は、『エヴァンゲリヲン新劇場版：Ｑ』。テレビシリーズをベースとした『序』『破』から一転、全く違うストーリー展開に、置いて行かれる人続出！

※7…ポリコレ

ポリティカル・コレクトネス。性別・人種・民族・宗教などに基づく差別・偏見を防ぐ目的で、政治的・社会的に公正・中立な言葉や表現を使用すること。映画界では、配役に関して『スター・ウォーズ』シリーズやディズニーなどでかなり意識されている。

※8…『トレインスポッティング２』

イギリス青春映画の傑作、『トレインスポッティング』（１９９６）の続編。前作から２０年ぶりに作成され大ヒット。『ターミネーター：ニューフェイト』と同じく、前作と同じキャストが登場。

ポルノ

『変態家族　兄貴の嫁さん』

豊楽志夫　ブラックシープ

１９８１年　国映・新東宝　６２分

監督・脚本　周防正行

出演　風かおる、山地美貴、麻生うさぎ、

大杉漣

コロナ禍の４月下旬、（２０２０年）近隣の映画館は全て休館という前代未聞の騒ぎとなる。唯一レンタルビデオ店が開いていたので、手当たり次第にＤＶＤを借りる。で、あるビデオ店で『変態家族　兄貴の嫁さん』を見つける。知る人ぞ知る若かりし頃の周防正行のデビュー作であるポルノ映画だ（当時はピンク映画と呼んだ）。しかも小津安二郎のポスト『晩春』をポルノの世界に引っ張り込むという大胆不敵な作品なのだ。

ストーリーは単純。母を亡くした４人家族（父、長男、長女、次男）のところへ長男の嫁がやって来る。新郎新婦は夜な夜な２階であえぎ声や物音を立てながらよろしくや

っている。それを階下に住む父親をはじめ家族３人が、微動だにせず聞いている（このショットはまさに小津の世界）、という図式。

長女はやがてありきたりの生活に絶望し風俗嬢になる。長男は慣れてくると新婦に満足できず、近くのバーの女とＳＭの世界にのめり込んでいく。次男は万引きをして警察の厄介になる。落ち込んでいると、兄嫁が何かと面倒を見てくれ、家を出る時にはやらせてくれる。要するに、皆、題名通り変な家族なのだ。最後に家に残されたやさしい嫁は、義理の父親を放っておけない。家にとどまって身の回りの世話をしていく…。

面白いのは映画の中身、セリフ、カメラワークまるまる小津安二郎の世界なのだ。父親の大杉漣は笠智衆、嫁の風かおるは原節子をイメージしている。そして、全編小津の作品をつなぎ合わせたパクリ。

父親の大杉漣は、まだ当時３０代だろう。髭を置いていて短いセリフをボソボソ喋るも、笠智衆の存在感には遠く及ばない。嫁の風かおるはオッパイが大きく豊満だが、表情に乏しくセリフも棒読み。長男夫婦の濡れ場も周防はいろいろなバリエーションを見せるが、あまりエロくない。全体に言えることは大人の学芸会を観ているようだ。

周防は高橋伴明の助監督を5年やり、監督として、やっと一本撮ることになる。ポルノでなければならないので、彼はいろいろ迷った末、日頃、敬愛している小津安二郎の作品の中から『晩春』をイメージし、原節子が嫁いだ先が「変態家族」だったら、どうなるだろう・・と考え構想を練る。周防は前もって、小津の墓前に参り、彼の作品をオマージュと言う高邁なものでなく、そっくりまねてポルノにする、ということを報告し了解を得た？という。

作品自体はあまり面白くないが、周防がその後、『シコふんじゃった』『それでも僕はやっていない』『終の信託』等の傑作を残しているところを考えると興味深い。

ポルノ映画という男と女というか、オスとメスの虚飾をはぎ取ったリビドーの世界を撮った監督たち、例えば神代辰巳、田中登、相米慎二らは後に秀作を残しているケースが多い。ポルノはいわば、真の人間ドラマを撮るための通過儀式のような気がする